

<講演>山上国際学寮
被爆者の証言を聴く

久保田 朋子

私は杉並光友会（杉並区在住の広島・長崎の被爆者の会）の一人です。この会は、私たちのような被爆者を二度と出さないように「核・核兵器のない」戦争のない平和な世界を目指して活動を続けています。今日は、皆様に私の戦争体験と疎開先の広島で被爆した時のことを、両親から聞いたことも交えてお話ししたいと思います。

私は1937年5月生まれの87歳です。生まれて2か月後の7月7日、日本が中国へ侵略し日中戦争が始まりました。

この時代の日本は軍国主義、戦争第一でした。天皇は神様であり、日本には神風が吹いているため戦争に負けることはないと教えられていました。侵略戦争で国土が爆撃されることはありませんでしたが、エネルギー資源が乏しい日本は、そのほとんどを輸入に頼っていたことから、1940年には配給制度を施行し、燃料をはじめ、食糧、生活必需品すべてが自由に買えなくなりました。配給物資だけでは足りないので、庭に畑を作ったり東京の郊外の農家で着物とお米を替えてくれると聞けば、リュックに着物を入れて交換してもらいに行きました。

翌1941年にはアメリカが対日石油輸出全面禁止通告をし、鉄の輸出も禁止しました。それにより、日本国政府は武器に必要な金属資源の不足を補うために金属類回収令を制定し、家庭にある金属類の供出が求められ、私の家でも鉄のフライパンや鍋、釜のほか、母の指輪や帯留めまでも回収されました。この頃から市民の間には「欲しがりません 勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」という標語が広まりました。いわゆる、国策標語といわれるものです。

そのような中、日中戦争は3年以上経っても終結することなく、1941年12月8日早朝ラジオから緊急放送が流れました。「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。本日未明西太平洋方面において戦闘状態に入れり」アメリカ、イギリスを相手に日本が太平洋戦争を始めた日です。母が「とうとう戦

争が始まってしまったわ」と暗い顔をしながらつぶやいていたことは今でも忘れられません。

開戦当初は、日本軍はシンガポール、マレー方面に攻め入っていたので、日本に爆弾が落ちることもなく静かな日々でした。日本本土が爆撃されたのは1942年4月18日東京、川崎、四日市、神戸などの都市に対して行われたのが最初でした。

そして、木造建築の日本家屋を焼き尽くすことを目的に1943年にはアメリカで焼夷爆弾が開発され、日本国土はあちこちが焼け野原となっていきました。そのような状況でも、国民には日本は勝ち進んでいると知らせていました。

1944年4月、私は小学校へ入学しました（国民学校）。ランドセルと防空頭巾を背負って通学しました。

入学して2か月後、学童疎開促進要綱が決定されました。学童疎開には、集団疎開（先生と一緒に東京から離れたお寺等で一緒に暮らす）と縁故疎開（東京から離れた親戚、縁者の所）の2つがありましたが、私の両親は悩んだ末、強制ではないので、もう少し様子を見ようと考えたようです。通学途中でいつ空襲警報のサイレンが鳴るか緊張の毎日でした。

夏休みのある日、家から歩いて20分くらいの同級生の家に爆弾が落とされ、一家全滅されました。私は、初めて人が亡くなるという経験をしました。しかも、病気ではなく、戦争で殺されたことに、言葉にはならないショックを受けました。後になって「あなたは夕飯も食べず、口もきかずに寝てしまったわね」と、母から言われたことを覚えています。

爆撃は日に日に増し、空襲警報のサイレンが夜中にも鳴り響き、1分でも早く防空壕へ入れようとする親は着替えの時間を惜しみ、子供たちに上着ともんぺ、靴下だけ脱いで枕元に置いておいて寝かせました。

1945年3月10日、東京大空襲があり、今の台東区の周辺に300機のB29が襲来し、焼夷弾が落とされ、10万人の人が焼け死んだといわれています。両親は、いよいよ東京は危ないからと、前々から相談して決めていた母方の祖母のいる広島へ疎開することにしたのです。東京大空襲の2、3日後、3歳上の兄と私は父の部屋に呼ばれ、「東海道線の切符が手に入ったら広島のおばあちゃんの家へ行くから、大事なものをまとめておきなさい」と言われました。2人だけ先に連れていかれて、東京の家に爆弾が落ちたらどうしようと不安でいっぱいでしたが、3月20日頃(?)

兄とともに東海道線で14～15時間かけて広島まで行きました。汽車の本数も少なく座席が取れなかったようで、通路に座って行きました。

気が進まないまま連れていかれたのですが、祖母の家に着くと祖母がニコニコしながら、「よく、来たわね、疲れたでしょう」と迎えてくれ、ホッとしたのを感じています。祖母の家には、陸軍船舶司令部あかつき部隊の軍人さんが2人下宿していました。近くには、京橋川という大きな川が流れていました。広々として明るく、東京のように防空壕もなければ空襲警報が鳴ることもなく、のんびりとしていました。3月の終わりには身重の母と長兄（中学3年）、姉（女学校1年）、父も疎開してきました。父は私たち4人の子供の学校の転校の手続きを済ませると、仕事の関係で東京へ帰って行きました。

4月、私は広島の小学校で2年生を迎えました。御幸橋の近くから市電に乗って通学しました。防空頭巾を背負っていくことはなかったと思います。6月に弟が生まれ、のんびりとした日々は夏休み前まで続きました。ところが、広島でも4月に学童疎開要綱が決定され、それを知った父が広島市内も危ないからと、改めて家族を郊外に疎開させることを決めました。

私たち家族は7月中旬、祖母の家から40kmほど離れた高田郡向原町に越しましたが、祖母は頑なに広島市内の自分の家から動きませんでした。向原には知り合いもほとんどなく、食料難の時ですから、母は食料の調達にとっても苦労したようです。身の回りのものと大切にしている物くらいしか持たずに越しましたが、母が大事にしていた小物はお米やサツマイモに替わって行きました。

7月末、姉の体調が芳しくなく、近くの医院を受診しましたが、心配した母は市内の日赤病院で診てもらおうことを決め、8月5日、日曜日、久しぶりに祖母の家を訪れました。

再び祖母に会え、久しぶりに食事らしいものが並んだ食卓で楽しい一日でした。「そろそろ寝なさい」と言われた時に空襲警報のサイレンが鳴りました。祖母が「あら、珍しいわね」と言いました。母は「河原へ避難しましょう」と言いましたが、祖母は「行ってらっしゃい」と言ったきり、家に留まっていました。母子6人で川のほとりに行くと、広々と長い河原には、私たちの他に二家族くらいしかいませんでした。間もなく、空襲警報は解除され、家に帰る途中、星空からピラがひらひらと舞い降りてきました。私は、1枚拾って帰り、祖母に渡しました。「『疎開するなら広島へ』って書いてあるわ、変ねえ」と母と顔を見合わせていました。

8月6日、雲一つない晴天でした。私が7時に起きた時、祖母はすでに勤労奉仕に出かけ、長兄もまた、祖母に用事を頼まれて外出していました。母は、姉を日赤病院へ連れていく支度を始めていました。朝食後、母は私と下の兄に「留守中に空襲警報のサイレンが鳴ったら外に出ては駄目よ、お蔵の中に入りなさい。」と言いました。留守番が嫌いな私は、お座敷から庭を眺めていると、ピカーッと光った瞬間、爆風で次の間まで飛ばされ、気絶していました。どれくらい経ったかわかりませんが、「ごめんなさいね」という母の声で目を覚まし、辺りを見ると姉と兄が正座して、覗き込むように私を見ていました。しばらくして、母に「立てる？」と言われ、立ち上がると耳の後ろから血が流れていました。幸い大したことはありませんでしたので、止血して、母は弟を抱いて皆で河原へ避難することになりました。外に出ると、瓦や土堀、ガラスや板が30cm位高く積み上がっていました。

母について川まで行くと、とても広いと思っていた河原には、人、人、人で、泣き叫ぶ声、子供の名前を叫ぶお母さん、御幸橋の方から怪我をして血を流しながら歩いてくる人、火傷した人たちが集まっていました。そして、船着き場の石段に着くとすぐ、そこに座っていた中学校の制服を着ている男の子から「水、水が欲しい」と言われました。顔を見ると風船のように膨れ、目は線だけ、唇ははれ上がっていました。どうしようと思ひながら隣を見ると、前の家に住んでいる叔母さんがいました。火傷をしていたのは、その家の子どもでした。「お兄さん、お水が欲しいと言っているわ」と叔母さんに伝えましたが、この頃の医学は、火傷した人に水を飲ませると死ぬと言われていたので、お水を飲ませてあげることはできませんでした。

ふと振り返ると、母の洋服が血に染まっていて、生後40日目の弟を姉に託すところでした。母は青い顔をして、今にも倒れそうでした。運良く救護班の兵隊さんが通りがかり、母を支えてくださって、そのまま船で川向こうの陸軍病院へ連れて行って下さいました。弟を抱えた姉と兄、私、残された4人は、ただぼんやりとその場に立ちすくんでいました。

何分経ったかわかりませんが、「軍人さんのお遣いで来ました」と兵隊さんがやって来て、リヤカーに私たちを乗せてあかつき部隊まで運んでくれました。兵舎は天井が高く、講堂のように広い板の間でした。私たち4人は黙ったまま、隅の方に座っていました。人気がなくがらんとした中、ただ一度だけ、2人の兵隊さんが兵舎の中を横切っていました。兵隊さん達は、町中に出て、怪我人、火傷を

した人、亡くなっている人の収容で出払っていたのです。

母は弟を庇って覆いかぶさった時、爆風で飛んできたラジオが脇腹に当たって裂傷を負っていました。病院で縫合してもらい、私たちの元に急いで迎えに来てくれましたが、私たちの居場所がわかったのは、あかつき部隊の兵隊さんが祖母の家の門に貼り紙をして知らせてくれたおかげでした。母が迎えに来た時は、兵舎はまだ静まりかえっていましたが、その後、午後には火傷をした人や怪我人の治療で建物の中は足の踏み場もなく、兵庭は死体の山が数えきれないほどできていたそうです。

祖母の家に着くと、長兄が家の中のガラスの破片や外れた建具を片付けて座る場所を作ってくれていました。お昼は過ぎていたと思いますが、昼食も夕食も食べた記憶がありません。夜になっても祖母は帰ってきませんでした。私たちが寝た後、長兄は祖母を探しに行ったようですが、見つかりませんでした。

翌日、ご近所の方が、祖母は日赤病院に運ばれていると知らせに来て下さり、母と長兄はすぐに祖母に会いに行きました。帰宅すると、母は「おばあちゃんは眉間に瓦が当たって亡くなったのよ」と言って、黙ってしまいました。もっと詳しく聞きたくても、怖い顔をしていて聞くことはできませんでした。あとから聞いた話では、爆心地近くにあった日赤病院の入口にあった大きな木の下には、放射状に死体が積み重ねてあったそうです。

8月6日に落とされた原子爆弾で、その日のうちに10万人の人が亡くなり、その年のうちに14万人が亡くなったと言われています。

私たちは、8日に再び疎開地に戻りました。原子爆弾と知ったのは戦後の事で、新型爆弾とか、ピカドンと言う人が多かったのです。

そして、翌9日、長崎に原子爆弾が落とされました。

8月15日、「玉音放送」。母から「お昼に大事なお話がラジオで放送されるから静かにしているのよ」と言われました。正午に天皇陛下のお声で日本が降伏したと知らされました。初めて、天皇陛下のお声を聞きました。

11月の終わり、東京の家に戻りました。

核兵器の恐ろしさは、放射線を浴びると、いつ症状が現れるかわからないこと。私の母も12年間体調不良が続き、12年目に白血病で亡くなりました。被爆79年目になりますが、未だに放射線の病と闘っている人がいます。

核・核兵器のない戦争のない平和な世の中のために一人一人の力が大切だと思います。

皆様が平和に暮らせますように心からお祈りしています。